

になる。これも易を通して政治の大意を見通していたからではないかと思えます。

竹村 易に通曉していたことが、人々の信望を集めた要因だと。

伊與田 そうでしょうね。政策など物事を見通すのに、仮定ではなく易学の視点で自信を持って判断しておられたに違いありません。

竹村 指導者にとつて易の知識は欠かせないものだったのですね。

伊與田 安岡先生もまた古今東西の学に通じておられました。いま考えるとその根底にはやはり易があったのではないかという気がします。

竹村 安岡先生は易を独学で学ばれたのでしょか。

伊與田 僕も一度それを先生に聞いてみようと思ひながら、ついにその機会を得ませんでした。しかし藤村與六翁をはじめとする易の大家の序文を先生が書かれていることを思うと、先生の易の知識は相当なものではなかったかということが窺えます。

竹村 余談ですが、伊與田先生と同じように若い頃から安岡先生の易講を受け、安岡教学に心酔していた佐藤久人という方がいらしたんですね。薬剤師の中でもトップクラスの方で、数年

前に亡くなられて私は一度もお会いする機会がなかったのですが、その方が『鼎の物指し』という本を出されています。

講演に行った時、ある方からたまにその本を手渡されて、べらべらとめくって驚きましたね。東洋の医学や薬学は易が根底にありますから、『易経』を中心にしながら、いろいろな古典の話が次々に出てくる。しかも学者の文章でもなければ、占い師さんの文章でもない、薬剤師という立場で様々な古典を自家薬籠中のものとされてきた。それは見事なものでした。

### 孔子の教えに息づく 易の思想

伊與田 『易経』という古典を一言で表現するとなかなか難しいものがありますが、竹村先生は皆さんにどのように説明されていますか。

竹村 伊與田先生もご存じのとおり、『易の道は深し。人は三聖を更へ、世は三古を歴たり』

という言葉があります。三聖は誰かという、一人目は伝説上の人物で伏羲といひ、易の基本となる『八卦』、『六十四卦』を考案したとされます。

二番目の聖人は周の文王とその息子周公旦を指します。紀元前一一〇〇年

頃の人で、文王は『卦』を説明する『卦辞』を、周公旦は『爻辞』(卦を構成する六本の爻の説明で変化の解説)をつくられたといひます。

そして三番目の聖人は、時代が下つて紀元前四七九年に亡くなった孔子です。孔子が最終的に『易経』を整理したと伝えられています。でもこれらすべて伝承ですので、はっきりしたことは分らないんです。

伊與田 孔子は若い頃はあまり易に興味を示さなかったようですね。しかし『論語』に「五十にして易を学べばまた大過なるべし」とあり、『草編三度絶つ』(孔子が『易経』を熟読し、綴じていた草紙がたびたび切れた)とい

う故事もあるように。年を取られてから易を熱心に学ばれている。僕は「五十にして天命を知る」という境地に至られたのも、易の影響があるのではないかと思つています。

というのも孔子は若い時に学問の道を探究し、いろいろななみに学び、万巻の書を読んでおられるわけですが、それでもまだ人間の世界をうるちよろざれていました。しかし、易に触れてそれを一歩乗り越えたあたりから、世界観、人生観を確立されていったんですね。

竹村 若い頃の孔子は自分の学問を

役立ててくれる国を訪ね歩いた時期もあるようですね。けれども、それまでは人の言に左右されていたということなのでしょうか。

伊與田 やはり借り物の知識です。単なる学者というのは大概そういうものです。しかし五十を越えて天命を知つてから、何も学者を否定しているわけではないけれども、考えが大きく変化していくんですね。

『易経』の歴史について私が補足させていただきますと、そういうことになりましょうか。

### 五千年間 読み続けられてきた理由

竹村 『易経』の成り立ちの説明に続いて、そこに何が書かれているかというお話なのですが、これはおもしろいことに占いを否定する本でもあります。占いのやり方が書かれていながら、『易経』を読めば占わなくても人の出処進退やこの世の中の動き、物事が変わる兆しのようなものが分かるんだと。

伊與田 そうですね。

竹村 そして易には三つの意味があつて、一つは『変易』、つまり世の中のすべてのものは時々刻々と変化していく、変化しないものは何一つないといふことですね。しかし、その変化の仕